林檎の花咲く所

辻美紀子

林檎の花咲く町

昭和三十八年五月二十五日発行©

定価 三〇〇円

著者 辻美沙子

発行者 奥原潔

発行所 家の光協会

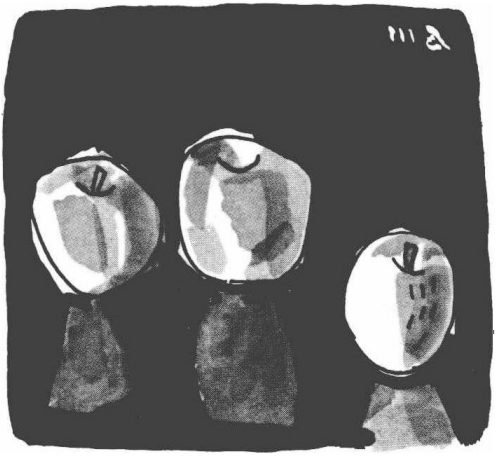
東京都新宿区市谷船河原町十一

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

印刷・共同印刷K.K. 製本・寿製本K.K.

林檎の花咲く町

辻
美沙子



家の光協会

カバー・扉装画　高田　誠

林檎の花咲く町

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「桂子従姉さん、お帰んなさい」
「あら、真由美ちゃん、お出迎えありがとう。なんだかちょっと見ない間に、また大きくなったみたい・・・」
「いやだわ。たった三月じゃないの、そんなにのびるわけないじゃない・・・」
真由美は長いまつ毛を伏せて、ちょっとさびしげに言った。真由美は去年の暮れに、交通事故で父を失ってから、母と二人、R町の母の実家へ身を寄せているのだ。
「荷物はこれだけ?・・・ちょっと弘さん、このスーツケース持って行って・・・それから駅前のハイヤー頼んでちょうだい」
真由美は、少し離れて立っている弘に、明るく呼びかけた。高校の制服を着た長身の少年は、桂子にぴょこんとおじぎをすると、黙ってスーツケースを運んで行った。弘は、リンゴ園の管理人、西村のむすこで、アルバイトに、相馬家の若勢代わりとして住みこんでいるのだ。
すらりと上背のある桂子は、洗練されたスタイルと美貌で、汽車から吐き出された人の中でひときわ目だつ。淡いラベンダーのスーツに、同色のコートが、いかにも春めいてはなやかだった。
桂子たちが改札口を出ると、駅前の広場でとぐろを巻いていた五、六人の少年たちが、いっせいにふり返った。はでなロカビリー・スタイルに、高校の制服姿もまじえたその少年たちは、見なれない若い女性の出現に、好奇的な視線を不遠慮にあびせかける。少年たちは、桂子たちのうしろに、婦人用のスーツケースを持った弘を発見すると、獲物を見つけた猟犬のようにほえて口笛をふく。そして足をふみならしてはやしたてた。

「イヤッホー、ホッ、ホッホオー！」
「ええぞ、ええぞ」
「ヒロシお供はつらいねっと・・・」
油でてらてらに光った学生服のビリケン頭が、芝居がかった口調で見えをきって、仲間を笑わせた。そして、テヘヘ・・・と頭をかくビリケン頭を、うしろからけしかけているのは、革のジャンパーに、細身のジーパンがよく似合う色白の少年である。そのあまりにも整いすぎた容貌が、かえって小憎らしい。
「なんなの、アレは・・・」
桂子は、勝ち気そうな黒いひとみを、不快そうにくもらせて言った。
「上級生よ。弘さんとわたしが歩くとああしてはやしたてるの。同じ家にいるからかしら・・・だから弘さんったら、わたしといっしょだと道の向こう側に行っちゃうのよ。変な人たちね・・・」
真由美は白い歯をみせて、おもしろそうに笑った。
東京の自由な空気の中で育った真由美は、そんな弘たちの態度がおかしくって、理解に苦しむらしい。だが弘は、きゅっとくちびるをかみしめてビリケン頭の五十嵐や、革のジャンパーの館岡をにらみつけていた。
にぎやかな駅前の大通りをぬけると、昔ながらの古びた町の素顔が現われた。東北特有の、軒の低い黒ずんだ家並みの間を、車は相馬家に向かって走って行く。やがて欝蒼と茂る大木に囲まれた、昔の代官屋敷のような相馬家のいかめしい門の中に、吸いこまれるようにはいって行っ

た。相馬家は、戦後没落したとはいえ、R町きっての旧家だった。

「桂子、どこへ行くの」

「ちょっと学校へ・・・きょうは十時から職員会議があるから、校長先生がみなさんに紹介してくださると言うの」

「そう、農林へ行くんだったら、長ぐつにしたらどう？　雪どけの道はひどいわよ」

「あら、道路はもうほとんどかわいてるわ」

「町の中はよくても、農林のほうはまだ悪いんじゃないの・・・そんな高いパンプス、はいていって知らないわよ」

「だって初めて行くのに、長ぐつだなんておかしくって・・・だいじょうぶよ、もうかわいてるわ」

桂子は、叔母の伊津子のことばをふりきって、パンプスに、新調のクリーム色のコートをはおって出て行った。

桂子が就職する県立のR農林高校は、県の方針で、農林と、町立の高等女学校が合併してできた総合高校である。だから校舎が、町はずれにある旧農林の校舎と、町中にある高女の校舎と二つにわかれている。学生たちは旧農林の校舎を第一校舎、旧高女の校舎を第二校舎と改称して通学している。

町はずれの農林高校へ近づくにつれ、道はだんだん悪くなった。このあたりは人家が少なく、畑と雑木林なので、まだ残雪が多いのである。桂子は、叔母の言うことをきいて長ぐつにすれば

よかったと、ひそかに後悔しだした。
雪どけのどろ道の中で、なるべくよさそうなところを選んで歩いている桂子の姿を、雑木林の奥から、館岡たちがみつけてそでひきあっていた。

「やあ、いらっしゃい。先日はどうも・・・さ、おすわりなさい。まだ少し時間がありますから・・・あとでみなさんに紹介しましょう・・・」
銀髪の佐藤校長は、愛想よく桂子にいすをすすめて、老眼鏡をはずした。
「相馬先生、たぶん、ご承知だと思いますが、わが校が県下はじめての総合高校として、R高女と合併して共学を実施してから、もはや十年以上たつのですが・・・これがいまだにいろいろと問題がありましてね」
「なんでしょうか・・・」
「それはですな、農科、林科、普通科、家政科の四科あっても、実際に共学しているのは、普通科だけという状態なのです。まさか家政科を希望する男子はおりませんし、農科、林科もその年によって、女子の希望者があったり、なかったりなんですね。現在は、幸か不幸か農林科には女子は一人も在籍しておりません。しかし、あなたの受け持ちの音楽だけはそうはいきませんで・・・」
「・・・」
「なにせ音楽は選択科目で、だれでも自由にとれますから、科を問わず、男生徒もとると思われます。それに音楽室は第二校舎ですから、あなたの授業はすべて、あちらの校舎で行なうことに

なります。ですから、あなたの時間には、第一校舎から男生徒が遠征しますから、くれぐれも男女関係については注意してください。第二校舎は、家政科の女生徒だけですから、いわば男子禁制の『女人の館』というわけですなあ。それで、クラブ活動も、いままでは原則として、すべて第一校舎でのみ行なうことになっています。しかし、あなたのばあいはそれも例外で、第二校舎に、男生徒が自由に出入りするのですから、しっかり監督してもらわないと困るのです。おわかりかな」

「はい、よくわかりました」

「若いあなたに無理かもしれんが、ま、そんなわけで、あなたの責任がなかなか重いことを自覚して、指導してくだされば けっこうです。いまの若い者ときたら、なにをしでかすかわかりませんからなあ、こわいですよ」

「恐るべき十七才ですか……」

桂子は皮肉な微笑を浮かべて言った。

「いやまったく、このごろの若い人は大胆ですからねえ。年ごろの男女をあずかっている教育者たる者は辛いですよ」

校長は嘆息しながら、桂子を絶望的に見やった。前任の音楽教師は、旧高女時代からの老教師だったせいか、男生徒はよっぽどの、音楽好きの変わり者でなければ選択しなかった。だが、この若くて美しい桂子を見ていると、ことしから、さぞかし音楽をとる者がふえるだろうと思いやられて、校長は頭が痛くなる。

桂子はまた、男女七才にして席を同じゅうせずの世代に育ったこの老校長と、自分たち若い世代のモラルは違うのだ…わたしは若いかれらの生活にとけこむ自信があると、ひそかにうぬぼれていた。そして新しい職場への意欲と、ファイトを燃やすのだった。

桂子が農林から出て来たときは、すでに陽は高く昇って、真昼近かった。雪どけの道は、ますます悪くなっている。職員会議が終わった後、各教科に分かれて、細かい打ち合わせをするのだが、音楽は桂子一人だし、学級担任もないので、早く解放されたのである。

桂子は絶望的に、どろでぬかった道をながめて立ちすくんだ。どうやって町まで帰ろうかと…。

桂子はふと、道路のそばの残雪の中を、だれがつけたのか、雪を踏み固めて一筋の細い道が、町へ向かってのびているのを見つけた。これ幸いとばかり、喜んで歩き出した桂子は、いくらも行かないうちにすべって、あおむけにひっくり返ってしまった。だれのいたずらか、雪道に細工がしてあったのだ。道に厚い氷を敷きつめて、そのうえに薄く雪をまき、うまく足跡のどろをつけてごまかしていた。

桂子が起きようとして、もがけばもがくほど、パンプスの先がすべって立てない。そのぶざまな姿を、遠くではやしたてているのは、館岡や五十嵐たちである。桂子がきっとして顔を上げると、悪童たちは一目散に林の奥へかけこんだ。桂子はその中に、見覚えのあるビリケン頭の少年たちを見つけて、くちびるをかんだ。

そのとき、桂子のそばを一台の小型三輪車が、スピードを落とさないで走って行ったので、桂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

子は頭から、雪どけのどろ水をひっかけられた。
やっと立ち上がった桂子は、遠ざかって行く車を怒りに燃える目でにらみつけた。あの車は、転倒した桂子の姿を認めていたはずである。桂子は当然、徐行してくれるものと思っていたのに、速度を落とすどころか、逆にスピードをあげて、新調のクリーム色のコートへ、思いきりどろ水をあびせて行ったのは許しがたい。
(いやんなっちゃう…あの学生たちといい、運転手といい、まったく、このごろの若い者ときたらろくでないばかりだわ)
桂子がぷんぷん怒りながら歩いて行くと、十メートルぐらい先に、その車が止まっていた。色の浅黒い、がっしりした長身の青年が、車から降りてくると、桂子に近づいてきた。
「すみません。おけがはありませんでしたか。悪気があってやったのではないのです。ぼく、免許とったばかりの新米ですから、あなたの姿を見つけて、あわてて、ブレーキとアクセルをふみ違えたのです。許してください」
「…」
「あの、そのお召し物、よごれましたね。せんたく代を弁償させてください」
「よろしいんですの」
「でも…あの、どちらへお帰りですか。せめてお宅の前までお送りしましょう」
「けっこうです。かまわないでください」
桂子は、しつっこくついてくる青年の手をふりきって、冷たく答えた。とりつく島もない桂子

のそっけない態度は、青年は、桂子のほっぺたや、鼻の頭についているどろを指摘する勇気を失った。遠ざかっていく桂子のうしろ姿を見送りながら、青年はおかしいやら気の毒やらで、しばらくそこに立ちつくしていた。

二

新学期になると、R農林高校では、全校をあげて学校林に植林に行くのが例年のならわしになっていた。

生徒の実習もかねて、隣接の国有林にも植林するので、そのため営林署から若い指導員が、いっしょについていくのだった。

ことしもその植樹祭がやってきた。しかし、付き添いの教官たちは毎年のことなので、陣場(じんば)佑(たい)を越えて、はるかかなたの学校林まで遠征するのをいやがって、留守(るす)番役を希望する人が多かった。だが、新米教師の桂子は、まだなにもかもが珍しくて、おもしろい時期なので喜んで参加した。

当日、桂子は濃い茶のスラックスに、ベージュのブレザーコートという、さっそうたるいでたちで現われた。張りきった桂子が生徒たちといっしょに、ハイキング気分で歩いていると、うしろから、三国(みくに)先生が追いついてきて声をかけた。

「相馬先生、ご紹介しましょう。こちらがきょうの指導員、営林署の五代(いよぎ)儀技官です」

ふり向いた桂子は、長身のその青年の、浅黒い顔を見上げて驚いた。クリーム色の新調のコー

トにどろ水をひっかけたあの青年だった。
青年は桂子を見ると、すまなそうにぺこんと頭を下げながら、人なつっこくほほえんだ。
桂子はむっとして、冷やかな目礼を返したが、三国先生の手前、さりげなく、
「はじめまして……相馬です」
と答えた。三国先生はどうやら、桂子たちといっしょに歩いていくつもりらしい。肩を並べてなにかと話しかけてくる。桂子はしかたなく三国先生のおもしろくもない冗談に笑いながらも、つれの五代儀技官は、わざと無視して顧みなかった。まだ、あの新調のコートを台なしにされたうらみが、消えていなかったから……。
「先生、ちょっと休んで行きましょうや。ああ疲れた。まったく役目とはいえ、ご苦労なこったすな、なんし五代儀さん……」
小太りしている三国先生は、額の汗をふきふき、もう道ばたにすわりこんでしまった。五代儀はクローバーの草むらの中に、さっと白いハンカチを敷いて、桂子の席をつくってくれた。
だらしなくすわりこんだ三人を見て、学生たちがおもしろそうに笑って行く。馬車やリヤカーに、いっぱい種苗を積んで、引っぱっていく学生たちは元気そのものだ。スコップや、くわをかついだ一団が通る。女生徒も、きょうはもんぺやスラックスの軽装で楽しげにさえずって歩いている。
「先生、もうへばったすか、早いすな」
そこへ通りかかった馬車の一団は、三国と桂子たちの姿を見つけると、いっせいに合唱しだし

た。
「なんまいだ、なんまいだ、チーン！」
「葬式まんじゅう食ったいな、なむあみだぶつ」
「あーりがたや、ありがたや……」
三国は目をむいてげんこつを振りまわした。
「まったくしょうがない奴らだ。ねえ、先生、わたしが坊主の出なもんで、あんないやみを言うんですよ。そりゃ、寺をとび出して、教師になったわたしですがね。生臭坊主だとか破戒坊主とか、しょっちゅう言われると、いいかげんくさっちゃいますよね。なにせ、わたしが坊主になったのは、葬式まんじゅうが食いたいからだなんて、とんでもない伝説をこしらえやがって……」
遠ざかっていく馬車を見つめている桂子には、三国のことばなどウマの耳に念仏だった。
桂子は、馬上から自分を見おろして、にやにやとうすら笑いを浮かべていた館岡の、端麗な横顔が小僧らしくてならないのである。そしていつもそばにはべっている、あのビリケン頭の五十嵐……あの館岡こそ革のジャンパーの少年に違いなかった。新任のあいさつに行った帰り、待ち伏せして、雪道に細工して桂子をころばせたのもそうだし、そしてあの最初の高三の授業……桂子は、思い出すのさえいまいましくて、全身の血がかっと逆流してくるのだった。
最初の授業……しかも高三というので、いささか緊張して音楽室のドアを開いた桂子は、三十人余りの女生徒にたいし、うしろのほうにわずか数人の男生徒が、借りてきたネコのように小さく

なっているのに拍子ぬけした。これでは混声合唱など思いもよらないことだ。それに、せっかく第二校舎まで来てくれた男生徒も、来たのを後悔している様子で、いまにも逃げていきそうにもじもじしている。女生徒はつんとすまして、男生徒のほうをふりむきもしない。桂子はまったく途方にくれてしまった。

そして、少し心を落ちつかせるために、ピアノをひきだした。そのとき、がやがやと騒がしい物音がしたと思うと、ひらりひらりと窓を飛び越えて、十数人の学生たちが音楽室になだれこんできた。

悲鳴をあげる女生徒……ほっと救われたように迎える男生徒……かれらは傍若無人に席につくと、大きな声をはりあげた。

「先生、どうぞつづけてください」

「あなたたちは、どうしてこんなところからはいってくるんですか。ちゃんと入り口からいらっしゃい」

桂子は学生たちの中に、あの見覚えのあるビリケン頭の少年たちを見つけると、かっとして叫んだ。しかしビリケン頭は、ふてぶてしく仲間をふりかえると、平然として言った。

「だって先生、道を通ってちゃんと門からはいってきたら、第一校舎からここまで十分はかかります。裏道を通って、裏門を乗り越えて窓からはいれば、走って五分でおつりがきます。ゆえに第二の方法をとったのであります。音楽の時間に、遅刻したくないのであります。なあみんな、そうだろ」

「そうだ、そうだ」
「だけど、お休み時間があるでしょ。十分間の休み時間に、充分にここまで来れますね」
「それがやっかない(だめ)んだす。前の時間は農場だすべ。肥桶かついでるんだもんな、くそのついた足さ洗わねば来れないすべ。なあ、おめんど(おまえたち)んだべ(そうだろう)」
五十嵐は、がらっと口調を変えて、方言で言った。学生たちはげらげら笑いながら、大声で、「んだ(そうだ)んだ」と和す。女生徒たちはまゆをひそめて横を向いていた。
桂子はあきれて口をつぐみ、授業をはじめたが、高校三年になってはじめて音楽をやるかれらは、音階の発声練習さえ調子はずれの奇声を発して桂子を悩ませた。いやドレミファぐらいは、いかにかれらとて、ちゃんと歌えるのだが、館岡の切れ長な冷たい目がいたずらっぽく合い図すると、心得た仲間は、わざと調子をはずすのだ。くすくすげらげら笑う仲間に桂子が非難のひとみを向けると、館岡は鋭い視線でさっと黙らせた。
桂子は、館岡に翻弄されているのも知らず、この山男どもにいかにして音楽を教えようかと、汗だくになるのだった。こうして館岡たちが、新米教師の桂子をさんざんからかって、意気揚々と引き揚げたのち、桂子は忠義顔した女生徒の告げ口で、きょうのことが館岡たちがたくらんだいたずらだと知り、地だんだふんでくやしがった。
学校林に着くと、農科と林科の生徒に、普通科と家政科の生徒を組み合わせて班をつくり、ノルマを割り当て、農林科の生徒の指導で植樹がはじまった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com